

牛ウイルス性下痢・粘膜病の 有効な対策について

● 牛ウイルス性下痢・粘膜病（BVD-MD）とは…

- BVDウイルスの感染により、育成牛には呼吸器病や下痢などを起こすほか、特に妊娠牛には異常産（流産や胎子奇形）や繁殖障害などを起こす届出伝染病です。
- 多くは一過性で回復しますが、妊娠牛が感染すると、本病に特有の**持続感染牛（P I 牛）**が産まれる場合があります、P I 牛は農場内の感染源となるため、大きな経済的損失を招きます。

● 持続感染牛（P I 牛）とは…

- BVDウイルスが妊娠牛（胎齢約18～125日）に感染すると、その胎子はP I 牛として生まれる場合があります、P I 牛は一見健康にみえても、やがて発育不良となります。
- P I 牛は、生涯にわたって体内にウイルスを持ち続け、尿や鼻汁中に**多量のウイルスを排出し続ける**ため、本病の感染源になります。
- 牛群内にP I 牛がいると、農場及び地域全体に感染が広がり、生産性が著しく低下します。
- P I 牛からは必ずP I 牛が生まれ、P I 牛に対する治療方法は**ありません**。



◆ 基本方針の5つの柱 ◆

次の方針は、どれか一つがかけても十分な効果が得られないため、総合的な取り組みを地域一体となって行うことが有効な対策となります。



① 関係機関の連携と情報共有

有効な対策の実施には、関係機関が密に連携・情報共有し、丁寧な説明により、生産者が対策の内容を十分に理解し、納得した上で行う必要があります。



② 効果的な検査の実施

日頃から飼養牛をよく観察し、本病を疑う症状を呈する牛がいた場合、速やかに、検査を実施します。

農場は元より、地域全体でサーベイランス等の効果的な検査を実施し、PI牛が摘発された場合、生産農場の全頭検査を実施します。

さらに、生産農場ではPI牛の最終とう汰から10か月間を基本に、牛群の妊娠状況を勘案して新生子牛を対象に検査を実施します。



③ PI牛の速やかなとう汰

PI牛が摘発された場合は、農場内や地域へのウイルスのまん延を防ぐため、PI牛の速やかなとう汰が必要です。



④ ワクチン接種の励行

子牛には移行抗体の消失時期にあわせ、育成牛・成牛には種付け前までにワクチンを接種することで予防できます。



⑤ ウイルスの侵入防止対策

導入牛から妊娠牛への感染を防ぐため、導入牛は当面の間、隔離します。また、消毒などの日常の飼養衛生管理を徹底します。

●ご不明な点は、最寄りの家畜保健衛生所にご連絡を

一般社団法人 青森県畜産協会